
心の奥の扉の先の可能性

天衣無縫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の奥の扉の先の可能性

【Nコード】

N5172Y

【作者名】

天衣無縫

【あらすじ】

生まれた日も生まれた病院も育った町も同じ。家も隣同士。そんな二人の成長を描く純愛ラブ話。『いつかきつと見つかるよ自分の可能性が』『時間はかかるけどな。でも絶対見つかる。俺たちが証明するよ。』

主に小学編、中学編、高校編に渡って描きたいと思います。尚、感

想や評価、お気に入り登録などぜひよろしく願います！

エピソード

七月七日。とある町のとある病院で一つの産声が上がった。

元気な男の子だ。

そしてそれを追いかけるかのように一時間後別の病室で産声が上がる。

今度は女の子。

時期が近いこともありその二人の赤ん坊は同じ病室になった。

互いの親は家が近い、というか隣同士のため関係は親密だった。

一週間後名前がつけられる。

男の子の名前は

『沢村 尋音』
さわむら ひろと

女の子の名前は

『桜井 渚』
さくらい なぎさ

それが二人の出会いだった。

第一話 お隣さん ―尋音目線―

俺は沢村 尋音。今日から小4になる！

俺の兄貴は七つ離れていて高校生。去年は一年生でインターハイ出たんだ！

ちなみにテニスね。

絶対本人には言わないけど兄貴に憧れて俺もテニスをするんだ！
近くのテニスクラブの入団条件が小4以上だったから今年からやっ
と入れるんだ。

「尋音ー？なにそんなにはしゃいでるの？」

今声をかけてきたのは桜井 渚。すぐ隣に住んでて窓から少し大きな
声を出せば聞こえるくらいの距離だ。

「あー渚！だって今日から四年生だぜ？嬉しいじゃん！」

「尋音って単純だねー」

「純粹って言えー。今から迎えにいくぞ？」

「うん！」

渚はクラスの中でもかなり可愛い方だと思う。俺の友達の中でも渚

を好きな奴って結構いるし。

「じゃ行ってきまーす!」

「気をつけなよー」

おれん家は俺、兄貴、母さん、父さんの四人家族だ。

朝は兄貴と父さんは俺よりも先に出てく。

そして走って十秒の渚の家のチャイムを鳴らす。

「あ、尋音くん。ちょっと待っててね・・・渚ー!?!」
「今行くー」

「毎日ありがとね」

「いや俺も一人じゃ寂しいから」
「ふふ。」

少し待つと二階から渚が降りてくる。

「お待たせー」

「おー。じゃ行こうぜ。おばさん行ってきます!」
「行っただけじゃい」

おばさんに手を振って学校へと歩き出す。

「尋音もテニスクラブ入るんでしょ?」
「おう!あ、渚もどうだ?」

「私はあんま運動得意じゃないから・・・」

「ものは試しだよ今週末だから一緒に行こうぜ」

「ま、まあ見てみてからね」

「よし！あ、誠司ー！」

誠司、空野そらの 誠司せいじは同じクラスの親友だ。

「あ、尋音おはよう」

「誠司もテニスクラブ入るんだよな？」

「うんボクも行くよ。渚ちゃんもおはよう」

「はあはあ尋音早いよ」

「あははホントに体力ないな」

「もーだから言ってるじゃん！」

「楽しそーじゃん」

「あ、月海おはよ」

月海こと、吉高よしたか 月海つぐみもクラスメートだ。

この四人が最近一緒にいるメンバーだ。

始業式も終わり、帰りも同じ、渚と帰る。

「渚？今日はそっちの家いつていい？」

「あーでも美咲いるよ？」

「いいよ全然」

「うん・・・」

「じゃ、ランドセル置いたら行くから」

ダッシュで部屋に行ってランドセルを投げて一階に降りる。

「渚ん家行ってくるー」

「由希ちゃんによろしくー」

「はい」

由希ちゃんとは渚の母さん。

今度はチャイムを鳴らさずに入る。

「おじゃましてーす！」

「あら、尋音くんいらつしやい」

「あ、おばさん、母さんがよろしくだつて」

「希ちゃんが？ならちよつとおじゃましてこようかしら」

階段を登ってすぐ右、そこが渚の部屋だ。

「入るよーっておい」

部屋に入ると渚が妹の美咲とケンカしていた。

「美咲ー！」

「やーだー！」

何やらおやつを取り合いをしているみたい。

「ケンカすんなー」

「あ、ヒロ兄ー！ナギ姉がー！」
「違うもん！それ私のだもん！」

「いいじゃんか、お姉ちゃんなんだろ？」
「えへへーヒロ兄大好きー」
「カンケーないもん！」

美咲は俺たちより五歳下、幼稚園の年中だ。

「渚にはあとでコンビニ行つてなんかおごるからさ」
「・・・しょうがないなあ。はい、ゴメンね美咲」
「ありがとう」

俺からしたら下に兄弟がいるのつてうらやましいんだけどなー俺末っ子だし。

それから六時くらいまで遊ぶ。普段は五時くらいまでが門限なんだけど渚ん家に行く時だけは甘くなる。

「じゃまた明日なー」
「うんバイバイ」

下に降りるとおばさんはまだいない。どうせウチでまた長話でもしてるんだろつ。

今度はおじやましましたを言わずに出る。

「ただいまー」
「尋音くんー！」

あ、あれ母さんは？

リビングに行っても母さんはいなかった。

「海斗くんが・・・」

「兄貴がどうかしたの！？」

「じ、事故にあったって・・・」

「！・・・兄貴！」

「尋音くん！」

それを聞くと俺は走り出した。病院は分かっている。この辺なら俺が生まれた総合病院だと思う。

そして病院に着いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5172y/>

心の奥の扉の先の可能性

2011年11月17日21時26分発行